

## 心理学

### ◇教員◇

教授 今水寛、村上郁也  
准教授 鈴木敦命、浅野倫子  
助教 田中拓海

### ◇学生◇

学部 50名 修士課程 14名 博士課程 2名

### (1) どういう心理学を学ぶのか？

ものが見えるのはどうしてなのでしょう？ 人ごみの中でも誰が話しているか分かるのはなぜなのでしょう？ どのようにして自分の手足をスムーズに動かせるようになったのでしょうか？ 年齢を重ねると他人に対する評価はどのように変わるのでしょうか？ 私たちの専修課程で研究しているのは、こういった問題です。

ものを見たり、手足を自由に動かしたり、言葉を話したりすることは、物心ついたときには自然にできるようになっていることが多いので、なんとなく「簡単なことだ」と思ってしまいがちです。しかし、因果関係を発見したり、人の気持ちを読み取ったりする高度な思考の働きはもとより、多くの場合「できてあたりまえ」と思っていることも、実はその原理がまだ十分にはわかっていない、非常に複雑な情報処理に支えられています。コンピュータやロボットが発達した現在、コンピュータが人間と同じように言葉を理解したり話したりしているように見えたり、ロボットが人間のようなスムーズな動きを実現する例も現れています。しかし、コンピュータやロボットは、人間と同じ意味で言葉を「理解」しているわけではありませんし、人間のように多様な状況に柔軟に適応しながら動くことは依然として簡単ではありません。人工知能の技術開発が著しい昨今だからこそ、その学習や進歩の基盤となっている人間の知的・情緒的な営みの仕組みや特徴・バイアスを理解することが、ますます重要になっています。また、人工知能と人間を比較することで、人間に対する理解を深めることもできます。

私たちの専修課程では、視覚、感覚間協応、注意、言語、感情、人物認知、運動学習といった人間の情報処理、認知・行動制御プロセスを対象として、科学的な方法にもとづいて先端的な研究をしています。具体的な研究方法は、研究テーマに応じて様々です。最も多いのは、パソコンの画面に何か課題を提示して判断をしても

らうという実験です。その課題をいろいろと工夫することで、頭の中でどのような情報処理や認知・行動制御が行われているのかを知ることができます。他にも、MRI（magnetic resonance imaging: 磁気共鳴映像法）という装置を使って脳の働きを調べる神経科学的な実験から、インターネットを介してリモートで行うオンライン実験、アンケート用紙にペンで回答を記入してもらった質問紙実験まで、多種多様な実験を実施しています。

**心理学専修課程に進学**すると、こうした実験の方法と、そこから得られた様々な知識を学びます。2年生のA Semesterには、まず、実験演習の授業で、心理学の代表的な実験をいくつも体験します。実験者の立場で実験を実施したり、実験参加者の立場で課題に取り組んだりしてデータを集め、それを統計的な手法で分析し、レポートにまとめて報告する訓練をします。この実験演習を補助する授業として、心理学研究法や統計についての授業もあります。

「統計」と聞くと尻込みする人がいるかもしれませんが、恐れるには足りません。数理統計学を究めるわけではなく、統計的手法の意味と使い方を学ぶことがメインの目的ですから、文系の人でも、心理学の学生向けに用意された統計の授業に出席してきちんと勉強すれば、充分、身につけることができます。現代社会では、企業運営や市場調査、金融取引など、ありとあらゆるところで統計の知識が必要になるので、大学院に進学する人はもとより、就職を目指している人でも、学生時代に統計を学んでおいて無駄になることは決まっていでしょう。

**本郷に進学**してからは、もう少し高度な実験演習の授業があり、心理学の教科書に載っているような、結果が知られている実験ではなく、どういう結果になるかわからない最先端の実験に参加することになります。一方、講義を通じて心理学の知識を広く身につけ、ゼミを通じて特定の分野の知識を深めていきます。専任の教員が行う授業だけではなく、毎年、外部から非常勤講師を招いて、発達心理学、動物心理学、認知神経科学、人間工学など、バラエティに富んだ講義を提供しています。

**4年生**になると、卒業論文に取り組むことになります。心理学専修課程の卒業論文は科学論文であり、実証的な研究を行い、その研究の背景や目的、方法、結果やその解釈を記します。多くの場合、自分自身のアイデアを教員や大学院生らと相談しながら膨らませ、実験を実施します。卒業論文のデータが、その後、国際的な学術雑誌に掲載された論文のなかで報告されることもしばしばあります。

文学部の心理学専修課程は、1903年に日本で初めて設立された心理学実験室を起

源としています。ここから、東京大学の各所に、それぞれ特色のある心理学関係の研究室が分かれていきましたが、文学部の心理学専修課程は、現在に至るまでずっと実験心理学の手法に基礎をおいて研究を続けてきました。「日本で最も古い」とは言っても、古くさい心理学をやっているわけではありません。実験心理学の分野で世界の最前線に位置する研究を進めています。

心理学研究室ホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/psy/>

## (2) 教員はどういう研究をしているのか？

### ◆ 今水寛 教授

近年、人工知能は身近な存在となり、人と自然な会話をを行いながら、(時に間違えることはあるものの) 予想外の知識も提供してくれるようになりました。身体を持たない人工知能に、ロボットという身体を持たせる試みも多く行われています。しかし、人間のように多様な状況で巧みに動作できるロボットは、未だに存在しません。人間と機械の大きな違いは柔軟な学習能力にあると言われていました。人工知能は膨大なデータを必要としますが、人間はわずかな経験から多くを学ぶことができます。生まれてから数年もたてば、無数の筋肉を上手にコントロールし、ロボットより遙かに器用に動作できるようになります。私たちの研究グループでは、運動や認知におけるヒトの優れた学習機能が、どのような仕組みで実現されているかを調べています。研究方法としては、心理・行動実験、fMRIなどの脳活動計測、計算理論などを用いています。また、研究の成果をリハビリテーション、ブレインマシンインターフェース、ニューロフィードバックによる機能回復などに役立てることに取り組んでいます。『認知心理学ハンドブック』(有斐閣)、『認知科学への招待』(研究社)、『認知心理学 第1巻: 知覚と運動』(東大出版会) に分担執筆しています。

研究グループのホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~imamizu/>

### ◆ 村上郁也 教授

私たちは網膜像そのものを意識化しているわけではなく、網膜像情報その他の生体信号が複雑な多段階の処理を経ることで、生活環境に適応し体制化された視覚世界がつくられているのです。本研究室では主として心理物理学の実験、副次的に機能的脳計測を行っています。特定の視覚刺激を観察して生じる知覚を実験参加者に報告してもらい、刺激と反応との関数関係を記述していくことで、脳活動を直接計測せずに脳内処理の様子を明らかにできます。視覚系を「誤作動」させる錯覚図形は特に重要なツールです。専用装置で眼球運動や身体運動などの生体計測を行った

りして、知覚におよぼす影響をみることもしています。『イラストレクチャー認知神経科学』（オーム社）、『心理学研究法1 感覚・知覚』（誠信書房）、『Progress & Application 知覚心理学』（サイエンス社）という3冊の基礎心理学入門教科書の編著、『感覚・知覚心理学ハンドブック 第三版』（誠信書房）という基礎心理学専門書の編著、そして『カラー版 マイヤーズ 心理学』、『脳と時間：神経科学と物理学で解き明かす〈時間〉の謎』という2冊の心理学概説書の翻訳に携わりました。

研究グループのホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~ikuya/>

#### ◆ 鈴木敦命 准教授

私たち人間は、他者に関する様々な推論や評価を普段から行っています。例えば、目の前の人物が誰なのか、何を感じているのか、どんな性格なのか、といった多岐にわたる内容を、正誤は別として、その人の外見、振る舞い、過去の経験などから日常的に判断しています。そうした他者に関する認知（人物認知）にはどのような特徴があり、その背後ではどのような情報処理が行われているのでしょうか。本研究室ではこうした疑問をめぐる研究を進めています。主な研究方法は行動実験ですが、脳活動計測も共同研究で行うことがあります。また、人物認知のエイジングないし年齢差について調べることで、世代間交流・理解を促進するヒントを得ることも目指しています。『顔の百科事典』（丸善出版）、『感情心理学ハンドブック』（北大路書房）などに分担執筆しています。

研究グループのホームページ <https://sites.google.com/site/atsunobusuzukilab/>

#### ◆ 浅野倫子 准教授

例えば今あなたが目にしている文字は、考えてみれば単なる線のかたまりです。それなのに文字だと分かり、読めて、意味が伝わるのはなぜでしょう。また、文字や物体を見たり、音を聞いたりしたときに受け取る情報は、誰でも全く同じなのでしょう。普段私たちが何気なく行っている「物事を認識する」という行為は、実は複雑で謎に満ちています。本研究室では、この謎の解明に、主に認知心理学や実験心理学の研究手法を用いて取り組んでいます。特に、文字を含めた物体認知、言語の認知処理、注意、多感覚処理、共感覚などのテーマを扱っています。言語機能とその他の認知処理機能（知覚、注意など）の関係にも興味を持っています。『共感覚』（勁草書房）、『言語と身体性』（岩波書店）、『有斐閣 現代心理学辞典』（有斐閣）、『人工知能学大事典』（共立出版）などに分担執筆をしています。

研究グループのホームページ <https://www.l.u-tokyo.ac.jp/~asano/>

### (3) 卒業生はどのような方面に進んでいるか？

1～4割ほどの学生は、人文社会系研究科の心理学専門分野をはじめ、心理学あるいは心理学に関連する他の分野の大学院に進学しています。大学院に進学した卒業生の多くは研究者になり、東京大学をはじめとする全国の大学や研究所で心理学関係の研究・教育に携わっています。海外の有名大学の教授になっている卒業生も少なくありません。また最近では、大学院を修了してから民間企業に就職する卒業生も増えてきています。

学生の多くは、民間企業や官庁に就職しています。就職先は様々で、特に決まった進路というものはありません。金融業、製造業、出版業など、多岐に渡っています。最近では、IT関係の職業に就く卒業生が増えています。変わり種としては、卒業してから他大学の医学部に進学して医師になった卒業生や、国会議員から大臣になった卒業生がいます。調査会社や広告代理店、官庁などに就職した場合には、心理学の知識や手法が直接活かせることもあるようです。厚生労働省や法務省などは、人間科学職の採用もしています。近年、多くの企業で、文科系と理科系の両方のセンスを備えた人材が求められるようになっており、本専修課程卒業生は、その点で歓迎されることが多いようです。

#### 文学部の扉 ポスターアーカイブ



#### 「AIと人文展 —AIのある研究生生活—」

人工知能(AI)の利用が「日常」となったいま、人文学の研究者はこの変化をどう受け止めているのか。研究者たちが今まさに経験している「AIのある研究生生活」とは。(第24回ホームカミングデー文学部企画シンポジウム「AIと人文」との連動企画)

主催：文学部・人文社会系研究科  
 協力：人文社会系研究科文化資源学研究専攻  
 期間：2025.10.14～10.31